

ヨーロッパ野外博物館会議参加および視察報告

小林 克*・高橋 英久*

目次

- はじめに
1. ヨーロッパの野外博物館
 - 1) オランダ 国立野外博物館
(Nederlands Openluchtmuseum)
 - 2) ドイツ バイエルン州グレントレイテン
野外博物館 (Glentleiten Freilichtmuseum)
 - 3) スウェーデン スカンセン野外博物館
(SKANSEN)
 - 4) 比較と考察に向けて
 2. ヨーロッパ野外博物館会議
 - 1) AEOMとは
 - 2) 会議の様子について
 - 3) 考察
- ヨーロッパ野外博物館会議 プログラム
AEOM参加館リスト

キーワード ヨーロッパ野外博物館 AEOM ヨーロッパ野外博物館会議

はじめに

2013年(平成25)3月25日、東京都江戸東京たてもの園(以下たてもの園という)ビジターセンターで、「これからの野外博物館」というシンポジウム¹⁾を開催した。ここにはオランダ国立(アーネム)野外博物館館長ピーター氏(Piter-Matthijs Gijsbers)、スウェーデン国立のスカンセン野外博物館館長ヨン氏(John Brattmyhr)に参加いただいた。これを端緒に、お二人の働きかけで、ヨーロッパ野外博物館協議会(以下AEOMという)から小林へ2013年総会への招聘状が届いた。これを検討した結果、たてもの園の学芸員・高橋英久と筆者が、平成25年8月27日からドイツ・ムルナウで開催されたAEOM総会に参加することとなった。また当該総会参加と前後して、ヨーロッパの先進的な野外博物館の事例をいくつか視察することとなった。

*東京都江戸東京博物館学芸員

ヨーロッパの中でもオランダ・アーネム市にある国立野外博物館や、スウェーデンのストックホルムにあるスカンセン野外博物館（以後スカンセン）は歴史も古く近年入館者も多い館であり、また前述の関係から両館ともに館長による解説をしていただけた。AEOM総会は2年に一回開催され、2013年総会は26回目を数える。世界博物館組織に認定・加盟している野外博物館に関する公式な、そして歴史ある組織である。毎回の総会では、野外博物館に関するホットな話題をテーマに、研究会が開催され、それらは年次レポートとして纏められる。

本稿は当該会議への参加とヨーロッパの野外博物館²⁾の視察について報告するものである。本報告の1章では、小林が視察した上記二つの野外博物館とAEOM総会の会場の一つであったドイツのザクセン州立グレントレイテン野外博物館の概要を報告し、併せて日本の野外博物館と比べた特色を述べる。次に2章は高橋英久によりAEOM総会の概要を報告する。

以上のように本稿は野外博物館の視察と会議の概要報告ではあるが、日本における野外博物館が今後進むべき方向性について考える上で、記録にとどめる意義があると考え。日本にも野外博物館は各地に存在するが、その多くが入館者数が伸び悩み、社会的にも広く認知されているとは言い難い状況である。多くのお客様を迎え活況を呈している、歴史あるヨーロッパの野外博物館に学び、日本の野外博物館をどのような方向に進めることが良いのか、分析し、議論を深める必要がある。

1. ヨーロッパの野外博物館

1) オランダ 国立野外博物館 (Nederlands Openluchtmuseum)

見学日は2013年8月26日で、同館の館長ピーター・ガイスパース氏より説明をしていただく。所在地は、オランダ王国のドイツに近いアーネム市郊外である。設立は1912年で、1918年に6棟の建物で公開を開始している³⁾。現在はオランダ本国中から建物を移築し、100棟程を数え、他にも入口部にある展示棟や様々な道具や生活用具等の収蔵展示棟等も存在する。移築した建物とその展示の年代は1600年から2002年までの長期にわたり、農家から都市の住宅、風車・水車、ビール工場等様々な性質の移築建物が有り、全て内部にも入ることが出来るようにしている。ただ、一部人形等を用いて展示再現しているエリアでは最小範囲で柵で区切り、立ち入りを制限している箇所もあった。開館時間は季節により変動し、夏期は無休で開館しているが、冬期は移築建物は閉まり、区域内を歩き建物を外から見ることしかできない。1990年代前半までは国営の野外博物館であったが、経営は独立した財団組織へと変わり、その段階で積極的な改革が行われ現在に至っている。

広い敷地内を一周するように古いトラム（路面電車）が走り、数十メートルおきに駐車場があり、自由に乗り降り出来る。風車も数棟移築され実際に動くように整備されている。技術職員もおり、トラムや風車を動かしている。各移築建物ではバラエティに富んだ再現的展示が行われており、情景再現展示の中では至る所で人形や音や映像、時にはコンピューター映像を使って再現性を高めている。

建物の性質に合わせ実際に多くの場所で家畜が飼われ、その鳴き声や臭いも情景再現に一役買っている。こうした家畜は、柵の中におり、お客様はリードを付けた犬を連れて入場できる。いくつかの再現

された建物は、レストランとして利用されている。パン屋では古い時代の店の内部とパン作りの工程が再現され、当時のパン屋のコスチュームを着たスタッフが伝統的なパンを販売していた。パンは別の場所で作っているが、パンの製造工程の展示で捏ねたパン粉やできたてのパンがあることにより、美味しそうなパン屋独特の匂いを漂わせている。

2002年に一番新しく移築され、再現展示されたアムステルダムの建物は、裏にバラックがあり、家を一周する裏小道に、再現されたバラックの年代が提示されている。再現年代は、小道を進むにつれてだんだん古くなる。またある部屋は覗いて見られるようになっており当時の映像と音が流されている。この建物の正面はカフェの様子を再現しており、実際に座って雰囲気を楽しむことが出来る。ここでもコンピューター制御された映像を用いリアルな再現となっている。

18世紀に建てられた集合住宅では、それぞれの時代の家族の暮らしが、職業や構成員が設定されて各区画毎に展示再現されている。時代順に18世紀の生活、19世紀、20世紀初頭、第二次世界大戦前、戦後と続く。個々の部屋では人形や写真があるととも当時の家具や道具等があふれ、設定されたある家族の暮らしが再現展示されている。

また1939年のインドネシア・モルッカからの移民のバラックでは、第二次世界大戦後の移民の暮らしをリアルに再現していた。この展示の背景には戦後オランダ国内で多発したテロ事件があるとのこと。そして実際にオランダ国内では著名であったモルッカ人テロリストの証言テープを流している。このバラックには常時解説員がいて、必ず来場者に解説を行っている。

展示を担当する職員とレストランや雑貨店、ショップを担当する職員は所属する団体が2つに分かれているとのこと。またコスチュームスタッフの半数近くがボランティアスタッフであった。

2) ドイツ バイエルン州グレントレイテン野外博物館 (Glentleiten Freilichtmuseum)

8月28日午後、AEOM総会プログラムの一部として、参加者を対象に同会場の野外博物館の見学があった。殆どの復元建造物に解説員がおり、ドイツ語と英語で解説していただいた。所在地はドイツ・バイエルン州でミュヘンからは100km程南であり、ムルナウという保養地の近くである。訪問した8月末でも朝は摂氏9度以下に下がっていて、アルプス的な気候である。バイエルン州が設立し運営しており、約60棟の建物が移築、公開されている。博物館はなだらかな起伏ある斜面に広がっており、農家や伝統的職人の建物等が並んでいる。傾斜と谷の地形を利用し、人工の池を作り、そこから谷川に水を流して4棟の水車小屋を河沿いに配置して実際に動かしている。ちなみにこの水は最後にポンプで揚水して上流の池に戻しているとのこと。

多くの牛や羊などの家畜が飼われているが、やはり全て柵の中や牧草地で飼育され、リードを付けた犬は博物館の中に連れて入ることが出来る。レストランも移築した建物を利用して何か所かで運営されている。ある建物には、陶器の工房があり、そこで陶器製品を製造して販売も行ってた。

殆ど家は中に入れ、中では様々な暮らしの様子や職人の物作りなどが再現展示されている。ただ、家の中では一部柵等で立ち入りが禁止されている場所もあった。全ての家には解説パネルがあり、そこには必ずドイツ・バイエルン州のどの地点から移築されたのか地図上に示されている。

またある増改築がなされていた建物では、増築された部屋と、当初から建てられていた部屋とで再現年

代を変えて展示していた。増築に伴い業態も変わっており、詳しくパネルで解説されていた。またある家では移築時の調査時点で発掘を行い、そこから出土した遺物を展示していた。発掘の解説パネルを置き、その家の生業にまつわる容器や食器等を再現された部屋の中にケースを設置して展示している。

3) スウェーデン スカンセン野外博物館 (SKANSEN)

見学日は8月31日で、ヨソ館長に説明していただいた。ストックホルム市内に1891年に設立され、現存する野外博物館としては世界で最古である。近くに建つノルディカ民俗博物館と共に設立され、この2つの博物館は1963年に組織的には分割され、現在は別々の財団法人が運営している。

スウェーデン国内各地から移築された建物は約160棟を数え、時代的には18世紀初頭から1940年代までである。工房街や農家と農園や教会、サーメ民族の住居その他様々なスウェーデン国内の建物がある。日本の様々な先学諸氏がスカンセンを紹介しているが、特に特徴的なのは、家畜があちこちにいるのに加え、エリアを動物園として区分し、スウェーデンにいる様々な野生動物も公開・展示している点である。広い敷地内では小さい馬に子供を乗せてスタッフが曳き、新設されたキッズコーナーでは子供達が動物とふれあえる。犬はヨーロッパの野外博物館では珍しく連れて入れない。これはスカンセンの中で小動物が至るところにおり、特に鶏やその他の鳥は自由に移動していることによる。

殆どの建物には、再現された時代・地方の伝統的コスチュームを着た解説員がいて、スウェーデン語や英語で解説を行っている。1棟に2、3人の解説員がいる建物もあり、建物によってはバターやパンを作り、興味をもつお客様に試食してもらっているところもあった。そうして作った食物は販売はしないとのことであったが、館内でイベントがある時には使用することもあるという。こうしたコスチュームスタッフの大半は職員で、ボランティアも少数いる。コスチュームスタッフは建物の性格により様々な実演もして説明も行う。これは再現展示であるとともにその場所にある資料の監視も兼ねているとのこと。コスチュームは約9万着所蔵しており、博物館の入口ゲート脇の古い建物で保管している。博物館は年中無休で、年間約150万人が入場する。年間に何日かは無料の日があるとのこと、私が続けて訪問した9月1日も無料で、とても多くの家族連れが来館していた。

殆どの建物内の再現が手で触れるようになっている。ヨソ館長によれば、時々壊されたり、持って行かれたりすることもあるが、実際に手で触れることが出来ることが大切であり、気にしていないとのこと。全体として映像やコンピューター等の現代技術を使う展示ツールは無い。建物の中には移築ではなく、複製(再現)建物も1軒だけある。これは移築しようとした建物があまりにも破損が進みすぎたため、その建物を元に再現したとのこと。

常勤職員は約200名で今夏の繁忙期には有期契約スタッフを500名雇っている。庭に関する様々な専門職人は通常約20人であるが、今夏期は更に約20人追加で雇用している。移築建物の中には少数民族サーメの住居があり、その中で生活再現を行っているスタッフだけは、その民族の出身者であるが、他のスタッフは出身地域にはこだわっていない。

4) 比較と考察に向けて

・スカンセン野外博物館で印象に残ったことは、とても多くの様々な市民グループが楽器を持ち寄り、復元された家の庭や、ステージ、広場等で演奏を繰り広げていた点である。広場では何カ所かで伝統的

な楽器の演奏とフォークダンスが繰り広げられていた。また数年前に完成した大きな雨天対応可の大きな野外ステージがあり、色々とパフォーマンスを行っていた。毎週テレビ放映されているイベントもあるそうである。スウェーデン国内の伝統的行事は全てスカンセンで行っているとのこと。また、様々なキッズコーナーがあり子供達が動物とふれあい学べる工夫がなされていたり、多くの様々な市民が主体的に楽しめる工夫が随所で強力に行われていた。博物館が主体的に市民が楽しめる工夫を凝らし、そうした場として広く認知されているからこそ多くの市民が来館して楽しんでいるのであろう。

・**グレントレイテン野外博物館**で興味深かった点は増築された建物で部屋により再現年代を変えていた点である。これは恐らく解説員に説明されないときちんと理解できないのではないかと思われたが、住居とは増改築がよく行われるものであり、一つの展示方法として斬新で、参考となるものであった。またある建物では発掘調査を行い、発掘の解説パネルを置き、出土した生業にまつわる容器や食器等を再現された部屋の中にケースを設置して展示している。発掘の成果は部屋の再現にも大きな根拠を与えていた。このように発掘調査を行い、それをきちんと分析することで、展示再現の説得力が強まり、よりリアリティーが増していると言えよう。

・**オランダ国立野外博物館**で印象に残ったのが、音・匂い・映像での展示再現である。特に近代の様々な生活再現においてとてもマッチしている印象があり、展示として分かり易い。全体として、人形を用いたり、コンピューター制御された映像を展示再現の中にさりげなく入れ込んだりして、再現展示にバラエティを持たせていた。例えば日本の野外博物館でも商店では、展示再現を活かしつつ、醤油や煎り酒・日本酒等を販売し、本物の鰹節やすめるの置き、匂いを漂わせることも可能であろう。ただ、そこには当時の衣服をまとめて解説し監視するスタッフが必要であることは言うまでもないが。

また移民や国内のテロ事件等の負の歴史についても展示再現の中で触れていた点はとても印象的であった。様々な証言を集め、それを流し展示により説得力を与えている。そうした展示を行っていることで、最近オランダ国民となった移民の人々にもこの博物館は自分たちのこともオランダ国民の一部としてきちんと扱ってくれているという穏やかな認識が広がるというピーター・ガイスパース氏の説明に感銘を受けた。これは日本の野外博物館も真剣に考えるべき課題である。もちろん政治的に中立であると言うことは博物館の根幹であるが、近・現代の暮らしと歴史を示すことが必然である野外博物館においては、負の歴史の展示についても、今後しっかりと議論していくべきであろう。

・**3館を通して感じたことは**、コスチューマーが昔の暮らしを再現、解説し、更には実際の家畜を飼育することで、より再現性が高まっていた。またトラムや風車、水車等を技術スタッフにより維持管理されていた。建物も様々な活用され、飲食や当時の物を当時の店屋で買うなど様々な体験が出来ていた。ただ建物の部材など、当初の材を使用することには日本以上にこだわってオリジナルな部材を出来る限り使用していた。

日本に於いても野外博物館に関わる様々なスタッフが問題点を共有し、積極的に議論を積み重ねていくことが必要である。そうした場を作ることも、現在日本の野外博物館で働く者の使命であると強く感じた次第である。

（文責 小林 克）

【註】

1) たてもの園は周知のように、江戸東京博物館の分館で東京都の野外博物館として、1993年に開園し、2013年3月に20周年を迎えた。当面の計画であった30棟を移築完成したことも相まって、今後のたてもの園の進むべき方向性を検討する一環として同シンポジウムを開催した。その概要は下記を参照いただきたい。

なお、下記報告の内容は講演者の講演内容をたてもの園がとりまとめ要約したものである。

江戸東京たてもの園「開園20周年記念シンポジウム これからの野外博物館」『たてもの園だより』42（江戸東京たてもの園 2013）

2) 私は野外博物館とはAEOM のいうところの「OPEN AIR MUSEUM」と同義と考えているが、本論ではさらに限定的に以下のように規定しておく。「野外博物館＝主に実際に存在した建築物等を調査・解体等を行い、それをある一定の土地に博物館資料として移築し、その建築物やそれらに関連する状況を再現、展示し、様々な体験等も出来る野外に存在する博物館」

3) Nederlands Openluchtmuseum 『Nederlands Openluchtmuseum Guide』(2012)

4) 最近ではたてもの園の学芸員早川典子が研修で1ヶ月以上スカンセン野外博物館に行き、その全体像を報告している。特にその組織、経営等についてはヒヤリングして纏められており、ご参照いただきたい。また、先学諸氏によるスカンセンの報告や日本の野外博物館等への影響については、落合知子氏がよく纏められている。そして現時点でのスカンセンの概要について一番分かりやすいものは、スカンセンが作成している以下の日本語のホームページである。

- ・早川典子「野外博物館スカンセンでの研修報告」『東京都江戸東京博物館紀要』第1号（東京都江戸東京博物館 2011）
- ・落合知子『野外博物館の研究』（雄山閣 2009）
- ・スカンセン博物館の日本語ホームページ <http://www.skansen.se/ja/kategori/japanese-ri-ben>



【写真1】 オランダ国立野外博物館 最近移築されたアムステルダム建物 中央部の隙間から奥に路地が伸びる



【写真2】 オランダ国立野外博物館 生活再現された部屋と壁に映し出された動画



【写真3】 オランダ国立野外博物館 時代別に部屋の展示を変えている建物



【写真4】 オランダ国立野外博物館 古い時代に展示再現された部屋



【写真5】 グレントレイテン野外博物館 水車小屋



【写真6】 グレントレイテン野外博物館 発掘された資料を建物内で展示



【写真7】 スカンセン野外博物館 建物の脇で飼われている牛



【写真8】 スカンセン野外博物館 移築された建物の周囲で演奏して踊る市民グループ



【写真9】 スカンセン野外博物館 囲炉裏端で作ったバターを勧める

2. ヨーロッパ野外博物館会議

1) AEOMとは

ヨーロッパ野外博物館協議会 (The Association of European Open Air Museums) は、ヨーロッパにおける重要な野外博物館の組織である。その設立の目的は、野外博物館によってもたらされる科学的、技術的、実践的かつ組織的な体験を各館で情報交換することと、広く野外博物館の活動を推進することである、としている。協会は、この目的のために会議を開催し、会議の報告書の刊行を行うとともに、協会の活動が円滑に行えるように手続きを進めている。

AEOMでは、野外博物館を構造的および機能的な実体として、居住形態や、住居、経済、技術を展示解説する様々な種類の野外におけるコレクションを有する施設、と定義している。

会議の参加の門戸は野外博物館に勤務する個人に対して広く開かれている。ただし、初回の参加はすでに承認されているメンバーの紹介が必要となる。今回のわれわれの参加は、前述のようにオランダ・アーネム野外博物館ピーター・マーティス・ガイスバース館長の紹介により実現したものである。

2) 会議の様子について

今回で26回を数える会議は1966年から始まっており、会議は少なくとも2年に一度、さまざまな国を会場として開催されている。以下はこれまでの開催年と会場となった国である。

1966	ベルギー	1990	チェコスロバキア
1967	スイス	1991	スウェーデン
1968	ドイツ	1993	ルーマニア
1970	デンマーク／ドイツ	1995	北アイルランド
1972	フィンランド	1997	エストニア／ラトビア／リトアニア
1974	オーストリア	1999	ドイツ
1976	スウェーデン	2001	ハンガリー
1978	イングランド	2003	スコットランド
1980	ノルウェー	2005	フィンランド
1982	ハンガリー	2007	ベルギー
1984	ドイツ	2009	デンマーク
1986	ポーランド	2011	スロバキア／チェコ共和国
1988	スイス	2013	ドイツ

2013年の会議の開催場所は、ドイツ・ミュンヘンから列車で1時間ほど南下したところにあるムルナウのグレントレイテン野外博物館とローテンブルクであり、8月27日から31日の5日間にわたり行われた。会議のプログラムは別紙の通りである。大きくはテーマに沿った上での基調講演や各館の事例報告、小グループに分かれてのディスカッションと、会場となる野外博物館の見学及び当該地域の史跡の見学であった。今回のテーマは「The house as an exhibit and its role in research and educational work」

日本語に訳せば「展示と調査研究活動における役割としての家（復元建造物）について」と解釈できようか。話の内容は復元建造物の再現に際しての忠実性や厳密性を論じていたと理解している。会議において使用される言語は英語とドイツ語。今回の会議では、我々を含めた24か国58館、134名が参加した。（p. 206～207 参加館リスト参照）

以下は会議に出席した際にメモした事柄である。AEOMとして、野外博物館の理念や復元建造物についての考え方を再考するべく出された意見である。

- ・最も根底にある精神は誠実で信頼できる博物館づくり
- ・家（house）とは何か？ 単なる物体ではなく「生活の容れ物」である。その土地に根付いたもので、社会、経済、文化、生態学的観点から有機的に捉えるべき。houseでなく、homeという呼称の方がこのことを反映している。個々の家屋を見るのではなく、もっと大きな視点からアプローチが必要なのでは。
- ・ノスタルジア（郷愁）の演出のみになってしまってはいけない。今日、さらに将来にとって意義のある遺産継承の場にしたい。
- ・野外博物館はビジターにとって隠遁の場所になってはいけない、触媒的なところであるべき。
- ・結局はテーマパークなのだろうか？（賛否）
- ・科学的（確証されている）方法を基盤としていること、歴史的に透明度の高いもの（100%は不可能だが）であることが大事。
- ・以前の野外博物館は建築そのものに重点を置いていたが、今日では、社会とのつながり、文化的背景に注目すべき。
- ・ビジターが何を求めているか？ 印象などをフィードバックしてもらうことが必要。
- ・コミュニティ（社会共同体）と積極的につながって、直接時代の情報を収集する努力をしたい。さらに特別展、特別なプログラムなども周辺住民とともに企画。展示を新しくする際、古い展示品（家屋）を取り壊すのか、村へ返還するのか、なども共同体と相談していくことが必要。
- ・人々が会おう場としての博物館を目指す。
- ・意義有る展示とは？ 今だけでなく、今後20～30年経った時にrelevant（妥当な、意義有る）ものであり続けられるか？

また、今日の一般の人々にとって19世紀産業革命前後の時代は想像を絶するくらい未知の世界である、そういったものを現代の人にどう関連づけていったらいいのだろうか？

3) 考察

会議への参加とヨーロッパの野外博物館の視察を通して、野外博物館が建物や生活道具、周辺環境を含めて、非常に有意義な歴史、民族、民俗、生活・文化等のさまざまな事象をよりリアルに具現化し、保存し、継承していく装置であるということを改めて強く認識した。会議の参加者からの報告や意見、食事の際の談話などからは、ヨーロッパにおいては、その多種多様な民族性から複雑な歴史や文化が育まれてきた背景が色濃くあるように感じ、いかにしてそれらを史実に基づいて伝えていくことに心を砕いているかが印象的であった。

しかしながら本会議で議論された課題の多くは、日本の野外博物館が抱える課題と共通であると感じた。今後の野外博物館のあり方を考える上で重要なのは、内部的には、個々の復元建造物のさらなる個別的調査とそれによって関連づけられる時代性の追求、さらには現代及び今後の生活様式に関わる資料の収集とそれらをどう展示などに生かすかのビジョンの策定が必要であろう。また、外部的にはそれらをハード（建造物や展示装置）やソフト（展示手法、関連事業）によってどのようにして発信していくか、また発信だけではなく社会教育施設の一つである博物館としていかにして社会に還元するかの方策を議論し、実現していかなければならないと感じた。

ヨーロッパの国々で管理運営されている野外博物館を中心にその役割や意義などについて広く議論する場を設け、それを継続させていることに博物館に対する各職員の使命感やその存在が社会的に強く認知されていることに感銘を受けた。文化的背景や国民性が異なる国々にあって展示手法や復元の方法などの忠実性や厳密性に若干の差異もあるであろうが、議論をすることであるべき姿を追い求めようとする姿勢を大いに参考にしたい。ただヨーロッパでの成功がそのまま日本で根付くとは限らないと考える。グローバルな視点から野外博物館の存在意義、これからの野外博物館の姿を考えさせられた。これをきっかけに改めて日本の文化、風土、考え方に適した野外博物館のあり様を模索していきたい。

(文責 高橋英久)

ヨーロッパ野外博物館会議（2013年8月27日－31日）プログラム

2013年8月27日（火）

- | | |
|------|----------------------|
| 午後4時 | ムルナウ文化コンベンションセンターで受付 |
| 午後6時 | 歓迎式 |
| 午後8時 | ムルナウ市内のレストランで夕食会 |

2013年8月28日（水）

- | | |
|---------------|---|
| 午前8時15分 | ホテル（ムルナウ）からグレントレイテン野外博物館へ移動 |
| 午前8時30分－9時 | 受付 |
| 午前9時－12時30分 | 会議 パート I
テーマ：展示と調査研究活動における役割としての家（復元建造物）について |
| 9時15分－9時45分 | 基調講演 Prof: Dr: Eva-Maria Seng |
| 9時45分－10時 | コメント Prof: Dr: Pieter-Matthijs Gijsbers |
| 10時－10時15分 | コメント Agot Gammersvik |
| 10時30分－11時30分 | 小グループによる議論 |
| 11時30分－12時30分 | 総会 小グループの議論の報告、考察 |
| 午後12時30分－2時 | 昼食 |
| 午後2時－5時30分 | ガイド付き博物館ツアー |

午後6時	博物館内レストランにて夕食会
2013年8月29日（木曜日）	
午前7時45分	ホテル（ムルナウ）からグレントレイテン野外博物館へ移動
午前8時30分－12時30分	会議の継続、パートⅠ
8時30分－10時	現在の問題や活動状況の事例報告
10時30分－11時	休憩
11時－12時30分	ポスターセッション
午後12時30分－1時30分	昼食
午後1時30分	グレントレイテン野外博物館からホテル（ムルナウ）へ移動
午後2時45分	リンダーホーフ宮殿見学
午後3時30分－6時30分	ガイドツアー　リンダーホーフ宮殿公園へ移動
午後7時	夕食
午後10時	ホテル（ムルナウ）到着
2013年8月30日（金曜日）	
午前8時30分－11時30分	ムルナウからローテンブルクへ移動
午前11時30分－午後1時	ローテンブルクのガイドツアー
午後1時－2時15分	ホールにてレセプション
午後2時15分－3時30分	ローテンブルクの歴史的建造物のガイドツアー
午後3時30分－4時	ローテンブルクからバートヴィンへ移動
午後4時－5時	ホテルへチェックイン
午後5時－7時	AEOM会議（会員のみ）
午後7時30分	ビュッフェレセプション
2013年8月31日（土曜日）	
午前9時15分－12時30分	会議、パートⅡ
	テーマ：展示と調査研究活動における役割としての家（復元建造物）について
9時15分－45分	基調講演
9時45分－10時	コメント
10時－10時15分	コメント
10時30分－11時30分	小グループによる議論
11時30分－12時30分	総会　小グループの議論の報告、考察
午後12時30分－2時	昼食
午後2時－3時30分	ガイド付き博物館ツアー
午後3時30分－4時	コーヒブレイク
午後4時－6時	ガイド付き博物館ツアー

午後6時 ホテルに戻る
 午後7時 Spitalkirche zum Heiligen Geistでコンサート
 午後8時 フランコニア野外博物館でお別れ夕食会

2013 AEOM (Association of European Open air Museums) 参加館

	館 名	国 名
1	Salzburger Freilichtmuseum Großgmain	オーストリア
2	Weinviertler Museumsdorf Niedersulz	オーストリア
3	Österreichisches Freilichtmuseum Stübing	オーストリア
4	The Sovereign Hill Museums Association	オーストラリア
5	Openluchtenmuseum Bokrijk	ベルギー
6	Upper Canada Village	カナダ
7	Schweizerisches Freilichtmuseum Ballenberg	スイス
8	Park Rochus, o.p.s.	チェコ
9	Wallachian Open Air Museum Roznov	チェコ
10	Narodni ustav lidove kultury	チェコ
11	Fränkisches Freilandmuseum Bad Windsheim	ドイツ
12	LWL-Freilichtmuseum Detmold	ドイツ
13	Freilichtmuseum Glentleiten des Bezirks Oberbayern	ドイツ
14	Freies Institut für Bauforschung und Dokumentation e. V.	ドイツ
15	Agrar-und Freilichtmuseum Schloss Blankenhain	ドイツ
16	Landesstelle für die nichtstaatlichen Museen in Bayern	ドイツ
17	Freilichtmuseum Molfsee-Landesmuseum für Volkskunde	ドイツ
18	LVR-Freilichtmuseum Kommern	ドイツ
19	Museumsdorf Cloppenburg	ドイツ
20	Bauernhausmuseum Amerang des Bezirks Oberbayern	ドイツ
21	Freilichtmuseum Hessenpark GmbH	ドイツ
22	Universität Paderborn	ドイツ
23	Open Air Museum Denmark	デンマーク
24	Den Gamle By	デンマーク
25	Frilandsmuseet Lyngby	デンマーク
26	Odense City Museum	デンマーク
27	Holstebro Museum	デンマーク
28	Estonia Open Air museum	エストニア
29	Amuri Museum of Workers' Housing	フィンランド
30	Seurasari Open Air Museum	フィンランド
31	Beamish Living Museum of the North	イギリス
32	Avoncraft Museum of Historic Buildings	イギリス
33	Black Country Living Museum	イギリス
34	Weald & Downland Open Air Museum	イギリス

	館 名	国 名
35	St. Fagans National History Musuem	イギリス
36	Georgian National Museum	グルジア
37	Museum Staro Selo Kumrovec	クロアチア
38	Hungarian Open Air Museum	ハンガリー
39	Sóstói Múzeumfalu	ハンガリー
40	Ethnographisches Museum	ハンガリー
41	Resort für kultur, Südtiroler Landesverwaltung	イタリア
42	Südtiroler Landesmuseum für Volkskunde	イタリア
43	Edo Tokyo Open Air Architectural museum	日本
44	Zuiderzeemuseum	オランダ
45	Nederlands Openluchtmuseum Arnhem	オランダ
46	Norsk Folkemuseum	ノルウェー
47	Maihaugen	ノルウェー
48	Museum Pierwszyh Piastow na Lednicy	ポーランド
49	National Village Museum	ルーマニア
50	Open Air Museum Old Village Sirogojno	セルビア
51	Skansen	スウェーデン
52	Jamtli Museum	スウェーデン
53	Vallby Friluftsmuseum	スウェーデン
54	Linköpings kommun	スウェーデン
55	Orava Village Museum	スロバキア
56	Museum of the Slovak Village	スロバキア
57	Le Roy Historical Society	アメリカ
58	Association For Living History, Farm & Agricultural Museums	アメリカ



【写真10】全体会議の様子



【写真11】小グループによる議論の様子



【写真12】グレントレイテン野外博物館内レストランでの夕食会